このほかにもまだ、モモによくわからないことがありました。ごく最近始まったばかりのことなのですが、子どもたちが、そんなものを使ってもほんとうの遊びはできないような、いろいろなおもちゃを持ってくることが多くなったのです。たとえば、※遠隔操作で走らせることのできる戦車――　でも、それ以上のことにはまるで役に立ちません。あるいは、細長い棒の先でぐるぐる円をかいて飛ぶ宇宙ロケット――　これも、そのほかのことには使えません。あるいは、目から火花をちらして歩いたり頭をまわしたりする小さなロボット――　これも、それだけのことです。

もちろんこういうおもちゃはとても高価ですから、モモのこれまでの友だちはひとつも持っていませんでした――　モモが持っていないことは言うまでもありません。とりわけこまることは、こういうものはこまかなところまでいたれりつくせりに完成されているため、子どもがじぶんで空想を働かせる余地がまったくないことです。ですから子どもたちはなん時間もじっとすわったきり、ガタガタ、ギーギー、ブンブンとせわしなく動きまわるおもちゃのとりこになって、それでいてほんとうはたいくつして、ながめてばかりいます――　けれど頭のほうはからっぽで、ちっとも働いていないのです。ですからけっきょく子どもたちは、むかしながらの遊びにまたまいもどることになります。これなら、②二つか三つの木箱とか、やぶれたテーブルかけとか、モグラが盛りあげた土の山とか、ひとすくいの小石とかがあれば充分で、あとはなんなりと空想の力でおぎなうことができるのです。

きょうの夕方も、子どもたちの遊びはどうやってみてもうまくいかないようでした。あれこれためしてみたあげく、みんなはとうとうあきらめて、ジジとベッポとモモのまわりにあつまってすわってしまいました。ジジにお話をせがみましたが、これもだめでした。きょうはじめて来た小さな男の子が、トランジスター・ラジオを持ってきていたからです。その子はみんなからすこしはなれたところにすわって、ラジオを音量いっぱいにかけていました。なにかのコマーシャルをやっています。

「そのうるさいラジオ、もうちっと音をさげられないか？」と、フランコという名のだらしないかっこうの男の子がかみつくように言いました。

「なにを言ってるのか聞こえないよ。」とはじめての男の子は言って、にやりとしました。「ぼくのラジオの音が大きいからね。」

「すぐに音をさげろ！」とフランコはさけんで、立ち上がりました。

はじめての男の子はちょっと青くなりましたが、それでもつっかかるようにこたえました。

「ぼくにとやかく言う権利なんか、きみにはないよ。だれにもないさ。ぼくのラジオの音をどんなに大きくしようと、ぼくのかってさ。」

「それはそうだ。」とベッポじいさんが言いました。「あの子に禁止することはできない。せいぜいたのむことができるだけだよ。」

フランコは腰をおろしましたが、いまいましそうに言いました。

「どこかほかのところに行きゃいいんだ。あいつときたら、きょうの午後じゅう、おれたちのじゃまばかりしやがったんだ。」

「それにはなにかわけがあるんだ。」とベッポはこたえて、はじめての男の子をめがねごしにまじまじと、したしみをこめてながめました。

「きっとわけがある。」

はじめての男の子はだまりました。しばらくするとラジオの音をさげ、顔をそむけて、じっとどこかをながめています。

モモはそっちに行って、だまったまま男の子のとなりにすわりました。男の子はラジオのスイッチを切りました。

（ミヒャエル・エンデ 著／大島かおり 訳『モモ』〈岩波書店〉）

※注　「遠隔操作」　はなれたところから機械の運転を行うこと

あなた自身がこれまでに、ぼう線部②に挙げられているような物、つまりお店で売られている「おもちゃ」ではないような物で楽しく遊んだ経験を説明し、その遊びのどのようなところが楽しかったのかを、書きなさい。

静岡 浜松西高中2007